



Victor・JVC

The Perfect Experience

TVF2009 レポート別冊

あなたの思いを 伝えてくれて ありがとう



2009年3月1日、
31年続いてきた東京ビデオフェスティバル (TVF)
が幕を閉じました。
あなたのおかげで TVF は国際的な広がりをもった
市民映像祭に育ちました。
応募してくれた作品は、累積 52,517 本。
アーカイブ (入賞作品) では、1,641 本。
世界の隅々から、市民一人ひとりの
「思い」と「いま」を伝えてくれました。
そして、そのすべてがあなたにしか創れない
世界にただひとつの宝物でした。
心をこめて、あなたの思いを伝えてくれて
——— ありがとう。

日本ビクター株式会社

TVF市民ビデオの軌跡

TOKYO VIDEO FESTIVAL



目指したのは「個人メディアの普及」。

東京ビデオフェスティバル（TVF）は、ビデオによる新しい映像文化の発展を目指して、日本ビクターが1978年にビデオ作品を募集して以来、毎年開催してきた「市民ビデオの世界的祭典」です。誰もが使いこなせる生活の道具（ビデオカメラ）によって、自分の思いや意見を映像に託し、作品を通じてコミュニケーションを広げていくというこころみでした。



ビデオによるコミュニケーションの広がりに向けて

TVFの作品公募がスタートしたのは1978年。それはVHS初のポータブルビデオシステムの登場に合わせ、市民による撮るビデオの時代の到来を予見して開始したものです。“ビデオは誰もが使いこなせる生活の道具”というモノづくりのコンセプトを受け、人と人との心のふれあいを実現したいという思いから、個人が撮影したビデオ映像をひとつの「メディア」ととらえました。

たとえば、音楽はレコードだけを持っていけば日本でも海外でも、そこにあるプレーヤーで聞くことができました。こうしてレコード（ソフト）とプレーヤー（ハード）は、言葉や慣習の壁を越えて、今日の音楽文化の基礎を築き上げてきました。同様に、ビデオカメラを使って自らの考えや意見を記録したメディア（当時はビデオテープ）で、いつでもどこでも再生してメッセージを受け取れるようにしたい——これが“ビデオコミュニケーション”の根本の考え方です。

これを実現したVHSビデオは、互換性を大切にしたことによってデファクトスタンダード（事実上の世界標準）となり、世界中の人の思いを1本のテープにのせて伝え合うことを可能にしました。TVFがスタートしたのは、そのVHSが発表された2年後。「ビデオ映像をコミュニケーションメディアとして位置づけ、多くの人の心と心を通わす手段としたい」というものでした。

映像作品制作による「表現とメッセージ」

私たちの暮らしの中にビデオカメラが登場したことにより、映像に対する認識は大きく変化してきました。それは「誰もが自由に、自分の思いを発信できる時代」を実現したからです。近年、放送電波にのせなくても、インターネットによって世界中の人々とのコミュニケーションが可能になりました。

個人が制作するビデオでは、作者自身の思いを自由に映像に託して伝えることができます。しかも、当事者でしかわからない情報までもリアルに伝えることができるのです。

ビデオカメラが家庭になかったころ、映像はテレビから一方的に流れ出てくるものでした。それは、放送や映画に代表されるマスメディアであり、限られたプロの人たちによって作られるものでした。テレビの前で見ていた私たちは“観る人”であり、創る（撮る）人ではなかったのです。

ところが家庭用ビデオカメラの登場で、この状況が大きく変化しました。“観る人”であった私たちは、“創る人”になることができ、ビデオ映像は「個人の考えや思いを表現するメディア」として新たな価値を生み出しました。

コミュニケーションを広げる個人メディア（ビデオ）の魅力と可能性

メディア	マスメディア	個人メディア
種類	放送 映画	ビデオ (自作ソフト)
形態 利用 スタイル	エンター テイメント性	コミュニケーション性 個人 → 個人 → 小社会 → 社会、公共 ネットワーク
主な特性	特定の人、 技術が必要 (限られた範囲内)	誰もが手軽に 利用できる

作品を通じて語り合う豊かな社会の実現へ

ビデオカメラで身近なできごとを撮り、当事者でなければ表現できない被写体に対する思いを織りまぜてつくる個人のビデオ作品。TVFには、マスメディアではとり上げられないような問題や、テーマにまで及んだ作品が数多く寄せられています。

作品を制作する際には、対象となる被写体を観察したり、ときにはインタビューによってその人の考えや思いを知ること（制作者と対象となる被写体）相互の理解を深め、そこから生まれる信頼によって二者の距離が近くなります。その時だけの上っ面の現象をとり上げるのではなく、そこにしかない、その人にしかできない深い思いによって結びつけば、一般的なテレビ映像とは異なる真実の映像が生まれるのです。

また、観ることで「作者はどう考え、何を伝えたいのか」を知ること、作品を創る人の思いを観る人が考えることで共感できたり、あるいは自分と違う意見や立場を理解することで「新しい発見」がもたらされます。

個人のビデオ作品「市民ビデオ」は、地域や国境を越えて語り合い、健全な社会の実現に向けて、その重要性をますます増していると言えます。



31年の成果、新しい「市民ビデオ」という分野を確立

近年のTVFは、自己の内面表現はもちろん、学校や地域など身近なできごとを題材にして、制作者の思いや視点を他者に伝えていこうとする個人ジャーナリズム作品が著しく進展しています。

たとえば高校生による「漢字テストのふしぎ」（第29回TVF2007ビデオ大賞/長野県梓川高校放送部）は、漢字テストの採点のバラツキや基準の曖昧さに端を発し、要因を解明すべく、高校生が様々な教育関係部署へ取材・記録していく学校発のジャーナリズムの作品です。しかも、単に学校内にとどまらず、小学校、中学校、高校の国語教師、教育委員会、さらに文部科学省の担当者にまでインタビューした結果、誰ひとりとして明確な回答ができないという教育界の矛盾にも言及。ついには、社会全体の動きに対する不思議さまでも包括した大きなジャーナリズムへと発展。一市民の視点が、学校や地域を動かし、社会全体に波紋を広げていく。このように市民ビデオの持つ特性は、社会をも変換させる大きな力を秘めています。

TVF31年の歴史の中で顕在化した“個”の視点は、「市民ビデオ」という新しい映像のジャンルを生み出したといっても過言ではありません。



TVFはどうして長きにわたって継続できたのか

「作品を通じて対話を広げる」。貫き通した

「ビデオの楽しさや創作の喜びを多くの人と共有したい」という願いから始まったTVF。31年間の応募総数は52,517本。参加された国と地域は110に及びます。その作品には、激変する世界情勢の「いま」と作者の「思い」が表現され、TVFが他に類のない世界規模での市民映像祭となったのは、こうした作品が在ってこそといえます。そこには、「作品を通じて対話を広げる」という、時代や世代を越えた独自のTVF精神が貫き通されていました。



市民がつくる、時代の“いま”と作者の“思い”による映像文化

TVFに寄せられる市民ビデオは、身近な生活の中にある話題や学校教育の現場から発せられる問題、地域の自然や伝統文化、地球規模の環境破壊、そして人種・民族の問題から戦争に至るまで、実に多種多様な広がりを見せています。

それら作品の制作者を見てみると、国内では個人でビデオ作品づくりを楽しむ方、子育ての記録として作品化する方、そしてビデオクラブや生涯学習の一環で取り組む方など、アマチュアが多いのが特徴です。中には、いまでは有名になった映画監督や番組制作会社で映像制作携わっている方の応募もありました。一方、海外からは、映画プロデューサーや番組ディレクター、映像制作を教える専門家などのプロフェッショナルが多く見受けられます。ただ、そうした応募者に共通しているのは、ビデオを通して移り変わる時代の「いま」と自分の「思い」を表現していることです。

TVF31年の歴史は、そうした市民ビデオ作家によって築かれてきた映像文化の歴史であり、「市民ビデオ」はそうした方々が盛り立ててきた映像文化です。

【旧字体】 【新字体】

環 環



普遍のコンセプトが礎となっている

コンテストではない「フェスティバル」として出発

応募作品の優劣を競う、いわゆる映像コンテストは、以前からいくつも実施されており、いまでもたくさん存在しています。

しかしTVFは、ビデオ作品に対して、他とは違うとらえ方をしていました。「映像によるメッセージの伝達や自由な映像表現の可能性を追究することで、社会や生活に密着した映像文化の普及・振興を目指す」——という明確な目的があり、それゆえに「ビデオフェスティバル」としたのです。

映像作品を「発表する」場としては、応募作品を多くの人に視聴してもらうため、インターネット配信やテーマ別の上映会等があります。これは作者以外の方にとっては「観る」場であり、作者と直接対話することで作品の狙いや思いを聞く場でもあります。さらに、審査委員が講師になって作品づくりのノウハウを解説するビデオセミナーやワークショップの「学ぶ」場、それらイベントに集まった方々が作品について意見を述べ合い、コミュニケーションを図るフォーラム等の「交流する」場を設けています。

そうした活動のすべてをTVF（東京ビデオフェスティバル）と位置づけ、表現者や参加者同士の交流の中で問題意識を共有します。このようにTVFは、「作品を通じて自らを表現し多くの人と語り合い、心を通わせるコミュニケーションの祭典」を継続したのです。

プロ・アマを問わない誰でも参加できる市民による映像祭

TVFの応募要領に記されている応募規定は、31年間、ほとんど変わっていません。それは、最初からゆるぎないコンセプトが確立されていたことを物語っています。

応募規定の中にある『プロ・アマを問わない』という項目は“プロとアマという既成の価値観でビデオの可能性を閉ざしたくない”という理由から決められたもので、誰でも参加できるフェスティバルであることの証でもあります。映像制作に携わっているプロの方でも、ひとりの個人としての視点で作品を創り、テレビ画面に映し出される映像はプロ・アマの区別なく対等という考え方に基づいています。

ワークショップ、フォーラム等は、作品を制作していない方でも、誰もが自由に参加できるオープンなTVFの活動のひとつです。



発表・表彰式で、大賞受賞者に贈られるトロフィーは、テレビのブラウン管をしっかりと握っています。それは、放送局から送られてくる番組を映すだけだったテレビを、ビデオ映像を映し出す“表現媒体”として、市民が手にしたことをあらわしています。

TVFの出発はどのようにして始まったのか

熱い議論から始まったTVF。“思い”を

「TVFはどのようにして始まったのか」——それを知るために、
当時はよく知る方にご参集いただき、伺ったお話をまとめてみました。



坂井敬一氏

(当時、広報室長としてTVF開催を指示)



中村 誠氏

(当時、広報室で広報及びTVFの実務を担当)

1979年3月29日。東京・青山の「青山ハナエ・モリビル」。そのイベントルーム〈THE SPACE〉では15時をちょうどまわったころ、電子オルガンが心地よいメロディを奏で始めます。ざわめきと共に華やいた空気が漂う中、会場に「今日は、東京ビデオフェスティバルの発表・表彰式にお越しいただきましてありがとうございます」のアナウンス——第1回の東京ビデオフェスティバル発表・表彰式が始まった瞬間でした。(当時) 広報室で広報担当であり、TVF開催の実務を任せられた中村誠氏は、緊張した面持ちで、にらむように視線を走らせていました。その熱気のある会場の様子を目の当たりにして、「成功する」と確信をもちはじめていました。

TVFはこれまでにない新しいマーケティング

第1回のTVF作品公募からさかのぼること2年前の1976年9月。日本ビクターはVHSビデオデッキの第1号機となる「HR-3300」を発表。先行するベータマックス方式を追いかける形で、家庭用ビデオ市場に本格的な参入を開始。“自分で撮るビデオ”の魅力を知らせるために、最初からビデオカメラも併売しました。

1978年3月。中村氏は、当時、上司で広報室長だった坂井敬一氏から「一般からビデオ作品を募集する映像イベントをやったらどうだろう」と示唆を受けます。それは、後に「ミスターVHS」と称されたビデオ事業部長高野鎮雄氏から与えられた課題に対する答えでもありました。高野氏は「技術屋はVHSを開発した。あなた方(事務屋)は何をするのか?」と、これまでにない新しいマーケティング策を求めていました。

当時、日本ビクターは、ビデオ撮影に関する相談受付や編集スタジオ機能なども備え、ビデオに特化した新しいタイプのビデオ・インフォメーションセンター〈VIC東京〉を開設。ホームビデオの普及を目的とした拠点としての役割も持たせていました。1978年にはVHS初のポータブルビデオシステム(「HR-4100」「GC-3350」)の発売が決定し、それに伴ったプロモーションの話が持ち上がりました。しかし、大手広告代理店に企画立案を依頼したものの、提案されるイベントはどれも満足できる内容ではありませんでした。

そのとき坂井氏から出たのが「ビデオ作品を募集する映像イベントの開催」です。これをきっかけにTVFが動き出したのです。その後、中村氏を中心にイベントの素案づくりがスタート。“機器を売るだけではなく、使い方まで消費者に伝える義務がメーカーにはある”との考えから、日本ビクターはメーカーとしてハード(ビデオ・ビデオカメラ)の生産とともに、個人のソフトづくりの支援(TVF)という両輪で、他には真似のできない新し

い独自の視点で、VHSのホームビデオを強力に牽引したのです。

31年間生き続けた不変のTVFコンセプト

当時は、8ミリフィルム作品のコンテストがすでにいくつが存在したほか、アルゼンチンの団体が主催し、世界中のビデオ作品を集めて上映する「ビデオアートフェスティバル」が、1978年に日本で開催されました。その際、日本側のコーディネーターが、ビデオアートの先駆的集団“ビデオひろば”の主軸であるビデオ作家の小林はくどう氏です。

国内映像コンテストでも、当時は上映される作品の多くはアート寄りのものでした。しかし、小林氏は「ホームビデオの普及によって、映像作品はアートの領域にとられない広がりを見せるだろう」と予見。そんなことから、日本ビクターが進める新しい映像イベントに、自ら積極的に関与していくことになるのです。

その年の6月。映像イベントの、コンセプト固めの会議がVIC東京で度々行われました。侃々諤々の議論が交わされる一方、共通した思いも。それは“コンテスト”ではなく“フェスティバル”ということ。「映像の作者は、自分の作品をひとりでも多くの人に“見てもらいたい”、他の人の作品を“見てみたい”、という意識があります。だから優劣を競うのではなく“フェスティバル”という位置づけにしたかったのです」と中村氏。小林氏も「一部の受賞作品だけでなく、より多くの応募作品を見ていただくことで、映像の可能性を世の中に知らしめたかった」と話します。

こうして、プロもアマも問わない、題材は自由、ジャンル分けはしない、国籍、個人・グループ、国内・海外は問わない——という内容を確認。この募集要領は、その後も変わることなくずっと生き続けました。それは「市民ビデオ」というビデオソフト制作を支援し、今日の映像文化に行き着く道しるべとなったのです。

絶妙だった審査委員のキャスティング

東京ビデオフェスティバルの基本コンセプト固めの一方で、実務・運営面での擦り合わせも進められました。

“あるべき姿”を追求する「TVFプロジェクト」を結成。選ばれた坂井氏、中村氏のほか、フィルムの世界の第一人者であり映画界にも詳しい高橋徳行氏(当時・玄光社『ビデオ読本』初代編集長)、“ビデオひろば”によって、ビデオによる新しい世界を実現しようとする気鋭の小林はくどう氏(当時・筑波学園講師)らに白羽の矢を立て、

共有したプロジェクトの立ち上げ前夜



社内外混合のプロジェクトをスタートさせました。

プロジェクトのひとり高橋氏は、「後援に特定のマスコミはつけないほうがいい、多数決になったときに困らないよう審査委員は奇数とするべきなど、具体的な話を紹介しました」と振り返ります。

さらに、審査委員の選定にあたっては、「広い意味での映像文化を担える人」「その世界・業界の第一人者」「誰もが知っていて納得できる人」「審査委員の一人として和を尊べる人」などを考案し、映画・映像関係者だけでなく小説家、画家、ファッションデザイナーなど、幅広いジャンルから候補者が挙げられました。

そして、7月末。手塚治虫氏（漫画家）をはじめ、当時新進映画監督だった大林宣彦氏（映画作家）、荻昌弘氏（映画・オーディオ評論家）、山口勝弘氏（当時、造形作家・筑波大教授）、そして南博氏（当時、一橋大教授）に審査委員長を依頼。企画から携わった小林はくどう氏（ビデオ作家）と社内から坂井氏を含めた、その道のスペシャリスト7名が決定したのです。小林氏は「ホームビデオの新しい可能性に立ち会っていたという気持ちが強くなりました」と回想します。こうして、ビデオという新しいメディアの可能性に対する独自のプロジェクトが立ち上がり、「世界の映像文化への寄与」を目指した挑戦が始まったのです。

「時期尚早」から「大反響」への転換プロセス

8月31日、東京ビデオフェスティバル作品募集開始の記者発表。会場に集まったビデオ記者会10数社のマスコミからの反応は「ビデオカメラ普及率0%の時代に、作品は集まるの?」、「時期尚早なのでは?」と、開催に懐疑的な扱いでした」と坂井氏。一般紙は一樣に冷ややかで、ここまで取り組んできた熱意に頭から冷水を浴びせられる記者発表となったのです。

9月。ついに第1回東京ビデオフェスティバルは、作品募集を開始。締切日は翌1979年1月31日。日本ビクターが想定した作品の募集目標は100本。しかし、翌年1月末に設定した募集締切の10日前になっても目標達成にはほど遠く、「失敗だったか」と関係者は頭を抱えます。

ところが、締切ギリギリで大量の応募作品がVIC東京に届きました。「作者の心理として、締切ギリギリまで手直したいということだったんでしょう」と小林氏。応募作品は257本に達し、予想を大きく上回りました。

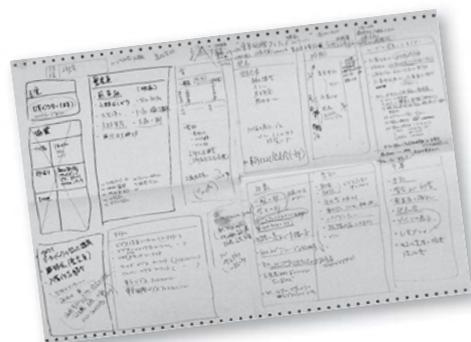
一方、中村氏は、発表・表彰式の1カ月前から、マスコミ各社を個別に集めて密かに入賞作品の上映を行い、TVFの理解を深める策を打ちました。披露された応募作品の質の高さに、マスコミ各社はようやく認識を新たにし、手応えを感じましたのです。

1979年3月29日。第1回東京ビデオフェスティバルの発表・表彰式。席数270席の小規模の会場でしたが、場内はマスコミの注目度が際立って高く、NHKを含めた東京キー局5社に加え、首都圏近隣の放送局のテレビカメラが並びます。さらに朝日、毎日、読売をはじめとした一般紙、スポーツ紙、地方紙。また、週刊新潮、週刊プレイボーイ、サンデー毎日、ビデオ読本など数多くの報道関係者の顔また顔。中村氏の目の前には、半年前の記者発表での冷やかな反応とは別次元の光景が…。「無数のカメラと報道陣が埋め尽くしていました」。

そしてビデオ大賞作品『走れ! 江ノ電』が発表されたのです。世界のプロ・アマを押しつけて、普通の市民である中学生グループが2年間かけてつくった江ノ電と仲間を愛する作品。それが人々に感動を与え、会場で新しい映像祭の誕生に歓喜していました。

華々しい成功とともに、31年にもわたる航海へと船出した東京ビデオフェスティバル。その後、VHSは熾烈な規格戦争に勝利し、日本初、事実上の世界統一規格として輝かしい歴史を刻みます。VHSのマーケティング策だったTVFは「自社だけにこだわらない映像文化の育成と創造」という大きな命題の実現に向けて、活動を活性化させていったのです。

TVF立ち上げの
企画構想メモの一部



高橋徳行氏
(当時、玄光社「ビデオ読本」の初代編集長)



小林はくどう氏
(当時、筑波学園講師)

TVF作品はどのような文化的価値を生み出したのか

暮らしの中にある多様な「いま」と「思い」

身近な生活の中でのにじみ出る個人の思い、メッセージの発信

世界中の地域で暮らしている人々の日常生活、慣習、社会、そして問題を記録した市民ビデオは、その時々の中での姿を映し出しています。中には、世界的に注目されるようなテーマや市民ビデオとして新しい分野を切り開いた作品もありました。それらは、時代を経ても輝きを失わず、むしろ時間が経過していくことで映像の価値は増し、見る人にメッセージを発信しています。

1997年～ メディアリテラシーの萌芽

メディアからの情報を理解するとともに、自分でもビデオを使いこなすという「メディアリテラシー」の重要性に光をあてました。



「テレビは何を伝えたか～松本サリン事件のテレビ報道から～」

(長野県松本美須ヶ丘高校放送部)

1980年～ ビデオジャーナリズムの誕生

レンズを通して社会を見つめ、撮影者個人の鋭い視点でまとめたビデオジャーナリズムが登場しました。



「THIRD AVENUE : ONLY THE STRONG SURVIVE」

(津野敏子さん&Jon Alpertさん・アメリカ)

1978年 市民ビデオ時代の幕開け

被写体とともに暮らす人々だからこそ表現できた作品は市民ビデオという時代をスタートさせました。



「走れ！江ノ電」

(神奈川県川崎市立御幸中学校放送部)

1992年～ 市民ビデオ作家の登場

既存概念にとらわれない作品が生まれ、そうした作者はビデオ作家や映像の専門家への道を歩みだしました。



「韓国へ行った」

(太田慎一さん)

1981年～ ビデオコミュニケーションの広がり

映像と音声で自らの思いを伝える、新しい「ビデオレター」作品が注目を集めました。



「ビデオ家庭訪問」

(山本清志さん)

1991年～ ビデオ自分史の創造

映像で自画像を描きこれまでの人生を見つめ直す「ビデオ自分史」が確立された年です。



「破れ表紙の人生アルバム」

(河田茂さん)

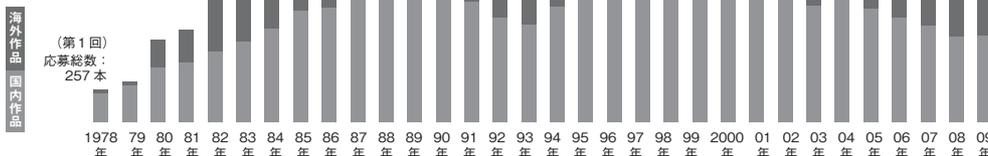
1978

【31回までの累計データ】

- ・ご応募いただいた作品数 …… 52,517本
- ・応募者の国と地域 …… 110の国と地域
- ・入賞作品数 …… 1,641本 (TVF事務局管理の作品アーカイブ)

【応募作品数の推移】

- 1978年 応募総数 257本 (国内 233本、海外 24本) で第1回スタート
- 1987年 累積応募総数が 10,000本を越える
- 1995年 累積応募総数が 20,000本を越える
- 2000年 累積応募総数が 30,000本を越える
- 2005年 累積応募総数が 40,000本を越える
- 2009年 累積応募総数が 50,000本を越える



1回から31回までの
累積応募総数は 52,517本

を描いた象徴的な市民ビデオ

2004年
メセナ大賞「映像開拓賞」を受賞

(社)企業メセナ協議会より「東京ビデオフェスティバル」の長年にわたる継続開催による社会貢献活動が評価されました。

2007年

横浜市後援により、
発表・表彰式を初めて
横浜市で開催

2002年～ 新たなコミュニティの胎動

ビデオ映像を活用して、地域社会と手を携えた活動をする地域コミュニティが目されました。



「ダムの水は、いらん！」
(佐藤亮一さん)



「Off To War : Chapter Two」
(Brent and Craig Renaudさん・アメリカ)



「Melanie-Ich gehe meinen Weg」
(Klaus Fleischmannさん・ドイツ)

個人の視点での市民ジャーナリズムが活発化し“個”だった意見が“公”の考え方に広がるようとしています。

2003年～ 市民ジャーナリズムの躍動

身近な暮らしの中に潜んでいる様々な問題について、個人の視点で取り組んだ提言が活発になっています。

更なる進展

2009



「ROGO」
(福岡典子さん)



「つぶつぶのひび」
(大木千恵子さん)



「Fear no Evil」
(Guillermo Costanzoさん / Teresa Boさん・アルゼンチン)



「漢字テストのふしぎ」
(長野県梓川高等学校放送部)

2005年～ 自己内面表現の充実

自分を見つめることにより「新しい自分を発見する」という自分探しの映像作品。勇気と感動をともなう作品がみられます。



「Plays the air.」
(内田セイコさん)

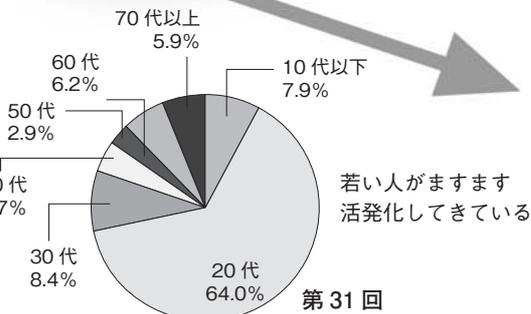
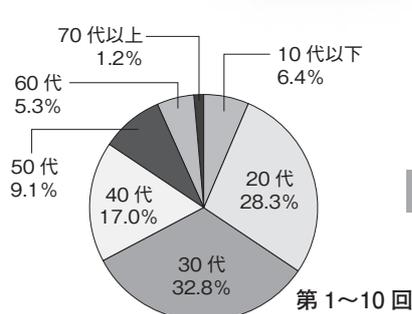


「The Last Chapter (最終章)」
(Makiko Ishiharaさん・カナダ)



「共に行く道」
(内田リツ子さん)

【応募者年齢の変化】



若い人がますます活発化してきている

『市民ビデオ時代の幕開け』 — 題材は暮らしの中に

そこに暮らす人だからこそ創れる作品

映像は見るものと思っていた人たちが、ビデオカメラを手にしたときから、身の回りにある身近な題材やテーマで映像作品を創りはじめました。それらは、被写体とともに暮らす人々だからこそ表現できた作品で、テレビ番組のようなマスメディアには取り上げられない内容です。そこに暮らす人だからこそ創ることができ、生活者の目線でじっくりとディテールを掘り起こして創りあげた、深みのある映像作品となりました。『走れ！江ノ電』が第1回のビデオ大賞に輝いたのは、まさにそんな“市民ビデオ”が誕生した瞬間となりました。



第1回・ビデオ大賞
『走れ！江ノ電』
神奈川県川崎市立御幸中学校放送部（神奈川県）

江ノ電と沿線住民とのかかわりや、江ノ電の持つさまざまな“表情”を移り変わる四季の風物などを折り交ぜながら描写。2年間にわたる取材テープを20分足らずに編集。単なるルポを超えた一篇のエッセイともいべき作品。



第2回・特選
『裕央君 ビカビカの小学1年生』
堀口敦司さん（神奈川県）

小学校入学式を前に、新入学の裕央君は家の中で返事の練習。お母さんが名前を呼ぶと、ランドセルを背負った裕央君が右手を力強く振り上げて「ハイッ」と元気な返事。家庭にビデオカメラがあっこそ撮れる成長の記録作品。



第1回・特選
『蓬（よもぎ）』
小林正彦さん（神奈川県）

老夫婦とその孫娘が陽だまりでよもぎを摘み、「よもぎだんご」を作って食べるまでを、淡々と撮ったホームドキュメント作品。



第1回・特選
『名もなき村の 名もなき生は』
浅野良一さん（東京都）

記録映画の監督をしている作者は、生家近くの小山のふもとにある先祖の墓から自分のルーツを探る。“ビデオ自分史”というべきジャンルを拓いた記念すべき作品。

<審査委員の評価>

南博 審査委員長

『走れ！江ノ電』について、「このようなすぐれた作品が、中学生によって生み出されたということは、ビデオの持つ若い生命力と未来の発展を象徴している」（第1回）

小林はくどう 審査委員

『走れ！江ノ電』は、「作り手が対象を信じ、ビデオを共に楽しむ市民の存在を信じているからこそ撮り得る世界を、TVFに最初に教えてくれた」（第1回）

大林宣彦 審査委員

「なぜ、私はそれを撮影するのか、そしてなぜそれを人に見せるのか、という個人の理由が明確であり、だからなぜぼくらはそれを観るのかという、観る側の理由も明確にされている」（第1回）

荻昌弘 審査委員

「アマとプロがまったく同次元の土俵で競い合う、という当初の基本目標が輝かしい成果をおさめた」（第1回）

『ビデオジャーナリズムの誕生』 — 自分の視点を持つ

ビデオジャーナリズムは個の中に存在

ビデオカメラを通して対象を見つめ、その事象や底に潜在するさまざまな問題を、撮影者が自らの視点で記録して第三者に伝えていく。その撮影者個人の鋭い視点でまとめた作品がビデオジャーナリズムです。地域社会には、当事者でなければその重要性に気づかない大小さまざまな問題があり、それを広く社会に訴えかけた作品は、早くも第3回から登場しました。第1回の『走れ！江ノ電』が市民ビデオの誕生を告げるものとするのなら、第3回のビデオ大賞作品『THIRD AVENUE： ONLY THE STRONG SURVIVE』は、その後、大きく発展していったビデオジャーナリズムにとって記念碑的作品です。



第27回・日本ビクター大賞
『Off To War： Chapter Two』
Brent and Craig Renaudさん・アメリカ

イラク戦争へアークンソー出身のパートタイム兵士が派遣される。クエートでの予備訓練を経て、戦渦が激化しているバグダッドへ。怖さが日に日におそってくる。一方、故郷では残された家族が、息子達の無事と一日も早い帰国を祈っている。



第3回・ビデオ大賞
『THIRD AVENUE： ONLY THE STRONG SURVIVE』
津野敬子さん&Jon Alpertさん・アメリカ
貧しい移民系白人の多く住む“ブア・ホワイト”。そこに住む人々の日常を捉えたシリーズ作品のひとつ。



第25回・優秀作品賞
『Globalization and The Media』・イギリス

政府のプロパガンダ・マシンと化した巨大メディア・ネットワーク。開かれた公正な報道を模索する人々は、ビデオカメラやインターネットに希望を見出す。報道を鵜呑みにすることへ警鐘を鳴らした作品。



第16回・特選
『聖域』
赤木仁一さん（鹿児島県）

特定の地域に生息し、保護されてきた鶴。人間の都合によって翻弄されている現状を、一市民の立場から静かに批判したルポ。



第18回・日本ビクター社長賞
『阪神・淡路大震災 淡路島救急の記録』
来栖 茂 さん（兵庫県）

淡路島の救急センターに勤務する一人の医者が、大地震の日の医療現場を捉えた言動午前7時、救急センターに次々と医者が集まってきた。続々と患者が運び込まれる。

<審査委員の評価>

荻 昌弘審査委員

「VTRが、なぜいま、これだけ広汎な爆発的注目の焦点内に入ったか。いうまでもなくこれが、「現代」を表現しうる最適の媒体のひとつであると、認識されかけたからに他ならない」（第3回）

小林はくどう審査委員

『THIRD AVENUE： ONLY THE STRONG SURVIVE』で、「あたかも身内が撮るように表情を引き出し、おかしさの背後にある状況、すなわち強者のみが生き残るアメリカを示している」（第3回）

手塚治虫審査委員

『THIRD AVENUE： ONLY THE STRONG SURVIVE』で、「われわれが数多くの映画やテレビドラマあるいは、観光旅行などでは絶対見られないナマの都会の汚濁に接しられスリリングだ」（第3回）

山口勝弘審査委員

『THIRD AVENUE： ONLY THE STRONG SURVIVE』は、「この世界の動向を確実に反映したものとして、重みを感じさせる」（第3回）

『ビデオコミュニケーションの広がり』 — 気持ちを伝える

自分の思いを映像にのせて

ビデオには“伝えあうメディア”という本質があります。人と人がその思いや体験を映像で他人に伝え、それを受け取った人がビデオで返信する“ビデオレター”という形は、その最たるもの。人の情感や文化、あるいは自然の素晴らしさをビデオカメラでとらえ、その感動を他人に伝えていくのは、個人が自分専用のテレビチャンネルを所有しているようなものです。個人の自由な発想、自由な表現で作った作品が、そのチャンネルから広く世の中に発信されていくこと自体、ビデオによるコミュニケーションです。



第30回・ビデオ大賞
『The Last Chapter (最終章)』
Makiko Ishiharaさん・カナダ

作者の亡父が書いた回想録をもとにカナダの家族と日本の家族を通して父を理解しようとする心の旅のドキュメンタリー。厳格な父はその最終章で子ども達を責め家族の溝を深くした。家族の思い出を振り返りながら、あらためて父の思いや真意を理解しようとする。



第10回・ビデオ大賞
『A Bridge Over the Ocean』
細見勝典さん、原動さん、Douna Boyntonさん（神奈川県）
川崎市の中学校と、アメリカのノースキヤナン校との4年以上にわたる往復ビデオレターの足跡をつづった作品。日本とアメリカの文化の違いなどがわかり、相互に理解を深めていく。



第11回・ビデオ大賞
『ビデオ家庭訪問』
山本清志さん（愛知県）

先生が生徒にムービーを貸し与え、生徒それぞれがビデオで家庭の紹介をするという新しい試み。思わぬハプニングが各家庭で展開されていく。



第12回・ビデオ大賞
『クールに包まれたあたたかさ』
大塚多喜子さん（愛媛県）

短い帰郷で家族とのやりとりを若い女性のナイーブな感性で描ききった作品。家族との会話や子供を思いやる行為を感じ、その心遣いを見逃さない。親子の自然に湧き出る愛情がある。



第25回・優秀作品賞
『PaPa』
Jon Alpertさん・アメリカ

父は神経の病に冒され、この10年苦しい闘病生活をおくってきた。祖父は父が幼い頃に自殺。人生に迷ったときに父親がいないことが、どんなに辛かったかを話してくれた。80歳の誕生日、50年連れ添った妻と家族に囲まれて楽しそうに過ごす。父はいつも私のヒーローだった。

<審査委員の評価>

南 博 審査委員長

『ビデオ家庭訪問』は、「ビデオの教育効果を世の教師、父母たちに笑いながら考えさせる貴重な作品」(第11回)

中谷芙二子審査委員

『ビデオ家庭訪問』は、「子供たちの生き生きとした表情と素顔の家族のさまざまな応対ぶりには驚かされた。ビデオの素地を十二分に生かしたすばらしい作品」(第11回)

羽仁 進 審査委員

『クールに包まれたあたたかさ』は、「個人的な世界を表現して、普遍的な作品に達する、いまやビデオの新たな伝統というべき境地を継承する見事な作品」(第12回)

北見雅則審査委員

『The Last Chapter』は、「家族とは何かを考えさせてくれ、周囲との多くの語り合いが生まれた」(第30回)

『ビデオ自分史の創造』 — 自分を見つめ直す

ビデオは自分を投影する鏡

自分史というと、ややもすれば“自慢史”になりがちで、自分の人生や仕事振りを正当化したくなります。ただし、自分史は“自分を見つめる”という側面も持ち合わせています。第14回ビデオ大賞を受賞した『破れ表紙の人生アルバム』は、自分を語るプロセスで、作者自身がビデオという鏡に自分を投影することによって、わが人生を見つめ直しました。ビデオ映像によりつくられた自分史は、単調な内容でも人を引き込む力を内包。TVFにおいてこの作品は“ビデオ自分史”を確立した作品であり、これを皮切りに、“ビデオ自分史”は、大きく成長を遂げました。



第14回・ビデオ大賞
『破れ表紙の人生アルバム』
河田 茂さん（広島県）

62年間の人生を映像とナレーションで
つづった自分史ビデオ。作者は「人生は
演技の連続だ」とつぶやく。



第17回・日本ビクター社長賞
『ひとりだけの海』
近藤甚之助さん（静岡県）

選暦を迎え、ビデオと俳句で老後を楽しむ作者が一人海水浴場へやってきて、カメラを回しながら俳句をひねりはじめる。



第18回・入選
『自画像』
佐藤 均さん（東京都）

ある画家が描いた自画像に触発されてビデオ自画像を試みた作品。自分の過去を訪ねて生まれ故郷へ行き、つかの間の安らぎを得るが、再び日常の世界へと戻る。



第31回・佳作
『とことん元気で』
松田治三さん（広島県）

ある日突然、大病（潰瘍性大腸炎）にかり死を覚悟した闘病生活の記録を自ら語るドキュメンタリー。異変を感じたときは大量出血、退院後も生と死が交錯する毎日と墓地まで決めた。春の訪れで増侶から諭され、1年間で健康は回復、すっかり元気になった。

<審査委員の評価>

小林はくどう審査委員

『破れ表紙の人生アルバム』は、「他者を追いかけるのではない。誰にも撮れない面白い被写体は自分なのだ」という、撮ることの原点を教えてくれる。“私たち”ではない、“私”なのである」（第14回）

大林宣彦審査委員

『破れ表紙の人生アルバム』は、「何よりもまず自分の言葉がある。いかなる映像作品であるとも、作品に最も重要なものは、この自己発見のための言葉なのだ」（第14回）

中谷芙二子審査委員

『破れ表紙の人生アルバム』は、「平凡な人生と自嘲しながら、目をつむれば天下は我が掌の内といった大胆さもニクい。低空飛行とは申せ、自前の人生をしたたかに演出」（第14回）

椎名 誠 審査委員

『ひとりだけの海』は、「一見誰でもつくれそうで、実際にはまさしく本当にその境地に達していないと作れない“俳句”のような味わいをもつ」（第17回）

『市民ビデオ作家の誕生』 — 自由な発想が結実

型にはまらない多彩な映像表現

TVFは、さまざまな市民ビデオのジャンルを切り拓いてきました。その結果、既成の概念にとらわれない自由な発想による作品が生まれるとともに、傑出したビデオ作家や映像専門家までも輩出してきました。自己流でありながらも、己の感性を信じ伸張させてきた市民ビデオの制作者は、型にはまらない新鮮な感覚での作品づくりが身上です。ドキュメンタリーはもちろん、アニメーションやドラマなどのジャンルにこだわらず、創造的なビデオ作品が目立ちます。近年では、CGや実写映像の合成技術などを巧みに取り入れた市民ビデオ作家も登場し、多彩な映像表現による作品が誕生しています。



第27回・優秀作品賞
『夏っちゃんの夏』
仙石幸太郎さん（神奈川県）

ある夏の日、パツイチで失業中の高橋の前に2才になる“夏子”が現れる。「その子はあなたの子です。しばらく預かってください。」というメールを送ってきたのは、以前つき合ひのあった美紀だった。美紀からの指示がもとになって、“夏子”をめぐる展開は果てしなく広がっていく…。



第15回・ビデオ大賞
『韓国へ行った』
太田慎一さん（東京都）

「来週引っ越しセンターが来るからよろしく」。私は妻に捨てられたのだ。私は韓国へ行き、一人の女性と出会った…。



第26回・優秀作品賞
『ホーム』
青木純さん/恵土敦さん/小柳祐介さん/八山健二さん（東京都）

地下鉄の駅。上りと下りの電車が同時に到着する。ドアが開く。それが合図のようにサラリーマンたちは一斉にホームに出て戦いを始める。名刺手裏剣が飛ぶ。新聞も週刊誌もすべて武器。武器がないものはキオスクで買う。発車のベルが鳴ると慌てて車内へ。企業戦士は会社へ遅れてはならないのだ。



第30回・優秀作品賞
『蒲公英の姉』
坂本友介さん（神奈川県）

二人の姉妹の複雑な心の動きを繊細な動きで描いた人形アニメーション。妹には二つの悩みがあり、一つは絵が描けないこと、もう一つは姉のことが恐ろしいこと。しかし、ある事件をきっかけに二人は打ち解けていくのだった。



第30回・優秀作品賞
『Ladenhüter (店主)』
Felix Stienzさん・ドイツ

ベルリンの街角にある小さなコンビニ店で繰り広げられるドラマ。いつも変わらぬ日常生活に新たな変化を求めて店主は休暇を取り旅に出た。店主がいなくなり閉店した店では、常連客が店主の帰りを待ち、そして店を守っていた。

<審査委員の評価>

小林はくどう審査委員長

『韓国へ行った』は、「主人公の心の存在を興味深く描いたドキュメンタリードラマ。エネルギー感溢れる韓国をとらえた巧みなカメラアイと編集は凄い。」(第15回)

椎名 誠 審査委員

『夏っちゃんの夏』は、「これまで国際的なショートフィルムコンテストをかなり見てきましたがそれらと比べて遜色がありません。TVFの選考委員をやらせてもらっていつもドラマに注目していましたがぼくが担当したこの十年でこの作品が最高の短編作品ではないか、と思いました」(第27回)

羽仁 進 審査委員

『蒲公英の姉』は、「いちばん感服した。この若い作者は、期待のアーティストとしての未来がとても楽しみだ。TVFの大きな流れとは少し異質かと思って、グランプリには推さなかったが、未だ心の中では迷っている。とにかく幻妙な美しさに溢れた傑作である。」(第30回)

『メディアリテラシーの萌芽』 — 映像教育とビデオ

市民ビデオが社会を検証する

メディアからの情報を理解するとともに、自分でもビデオを使いこなすという「メディアリテラシー」の重要性、世論をリードするマスメディアのパワー、そしてあり方に疑問を覚え、自分たちのビデオカメラを通して報道を検証。また、一人のジャーナリストが強い信念で作った作品は、まさに、ビデオが社会のあらゆる問題の発見と解明のためのツールであることを強烈に物語っており、ビデオこそ現代の“メディアリテラシー”であるということを教えてくれます。マスメディアに対する個人メディアとしてのビデオ。その特性を生かし、自らの視点で表現していくビデオリテラシー。変革する現代のメディアリテラシーの一つとしてのビデオは、新しい表現の手法を可能にしました。



第20回・日本ビクター大賞
『テレビは何を伝えたか～松本サリン事件のテレビ報道から～』
長野県松本美須ヶ丘高校放送部（長野県）

確固たる裏づけのないままに伝えていかなければならない今のテレビ報道のあり方に、高校生らしい見方で問題の本質に迫っていく。



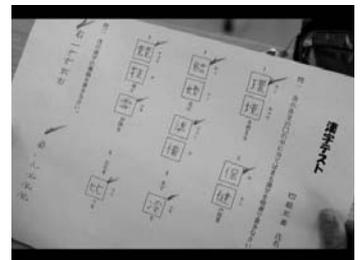
第19回・日本ビクター大賞
『高校生のみた沖縄』
ソフト・コム（長野県）

沖縄県普天間高校の生徒たちが、米軍基地の跡地利用の未来模型を作った。そして全国の高校生にビデオで沖縄へ来てくれるよう呼びかけた学校ジャーナリズム作品。



第26回・ビデオ大賞
『逆上がりできないの 何でだろう？』
石津善久さん（愛媛県）

クラス26名中、逆上がりができないのは18名。これは大問題と考えた担任は宣言。「クラス全員で逆上がりができるようになろう」。練習器を工夫して全員で努力を続ける。徐々に成果が出始め、ついに3月、最後の1人が成功する。



第29回・ビデオ大賞
『漢字テストのふしぎ』
長野県梓川高等学校放送部（長野県）

小・中・高200名の先生による漢字テストの採点のバラツキや基準の曖昧さに着目し、要因を解明する行動の取材記録。教育委員会、文化庁などの関係部門に基準はなく、入試基準か先生のこだわりなのか。様々な発見や矛盾を高校生が解明していく。

<審査委員の評価>

南 博 審査委員長

『テレビは何を伝えたか～松本サリン事件のテレビ報道から～』は、「テレビを通してメディアの奴隷になってしまっているわれわれに深い反省と奮起をうながしてくれる。若者の目を通して感性を生かした視点で、社会の汚点をするどく捉えている若い世代の目覚しい活躍がたのしい!」(第20回)

中谷美二子審査委員

『高校生のみた沖縄』は、「ビデオの呼びかけに応じて、日本全国から沖縄に集まった高校生たち。自分の意思で行動し、自分の言葉で語ることができたときの、素直で自信に満ちた喜びがあふれていた」(第19回)

高畑 勲 審査委員

『漢字テストのふしぎ』は、「先生方、教委、文科省の役人に漢字テストの具体例を示して問いただし、厳しく採点される漢字のとめ、はね、はらいなどの基準が、じつは至極あいまいなことを見事に浮かび上がらせて、異常な現状を解決することを切実に促す。その追求がじつに理知的でありながら、先生方を構えさせず、ありのままに語らせて矛盾を露呈させる、高校生作者の力量に感嘆した。ユーモアもあり、素晴らしい!」(第30回)

『新たなコミュニティー、市民ジャーナリズムの躍動』

ビデオを介して生まれる小社会

ビデオ映像を活用して、地域社会と手を携えた活動をする地域コミュニティーが注目されました。また、そこから展開する市民ジャーナリズムは、近年、著しく進展しています。戦争あり、身近な市民ジャーナリズムありと、広く深いテーマの中で、当事者しか知らない情報を伝えていく。1台のビデオがあれば、世代を超えたコミュニケーションをとることも可能になります。作品は“作者”と“観る側”がビデオを介して出会ったことから、“小社会”とでも呼べるような新たなコミュニティーがそこに生まれることを感じさせてくれました。



第24回・ビデオ大賞
『ダムの水は、いらん！』
佐藤亮一さん（熊本県）

農家と環境保護運動がスクラムを組んだドキュメンタリー記録。周辺農家の声を伝える丹念な取材と行政側との対比を鋭く突く、論理的な展開の作品。



第6回・特選
『なにかがくるっ！～銀輪公害～』
神奈川県川崎市立住吉中学校放送部（神奈川県）

銀輪公害をテーマとした問題告発のドキュメンタリー。行政と市民の対立の構造が生々しく描かれ、“公”と“私”の関係という、現代の問題を見る側に考えさせずにはおかない迫力が、1年半以上の取材中にはトラブルも発生、問題の根深さが浮き彫りに。



第24回・日本ビクター大賞
『子供達と共に』
黒河貫さん（愛媛県）

自然を中心に撮り溜めたビデオの映像を、クイズにして子供たちに見せようと、そのためにレンズも手作りした。完成したビデオを持って近所の小学校を訪ねる。子供たちの表情や反応が、実にいきいきしている作品。ベテランビデオ作家による、新しい地域コミュニティー活動への挑戦の記録。



第31回・日本ビクター大賞
『共に行く道』
内田リツ子さん（千葉県）

80歳を越した老夫婦が日常生活から介護の現状や家族の大切さを考えるドキュメンタリー。「介護4」の夫を介護する妻が、自らの負担や介護サービスの実態、好きなカラオケを楽しむ夫の姿を通じて老老介護の現実を描き出し、最後は夫婦の絆と実感する。



第29回・ビデオ大賞
『Fear no Evil』
Guillermo Costanzoさん
/Teresa Boさん・アルゼンチン

アラブ人の若者3人が語る米国の戦争政策と未来への思考についてのドキュメンタリー。イラク、パレスチナ、ニューヨークと異なる土地で育った3人はイスラム教徒の考え方や米国の行動などについて自らの考えを率直に主張し、祖国の安全と平和を願う。

<審査委員の評価>

手塚治虫審査委員

『なにかがくるっ！～銀輪公害～』は、「NHKなら自転車置き場を正規に設けている描写で終わるところを、一瞬でぶちこわすラストのアイロニーは面白い」（第6回）

佐藤博昭審査委員

『ダムの水は、いらん！』は、「作者の力強い態度に貫かれた作品。問題のポイントを冷静に示し、見る側に考えさせる。映像が運動とともに在るためのひとつのモデルだ」（第24回）

羽仁進審査委員

『Fear no Evil』は、「テロというものが一部の人々だけでなく街中を破壊して撃ち合っている土地の少年少女の多くの中で生きていることを鮮明にとらえて私たちの心を突き刺す」（第29回）

椎名誠審査委員

『共に行く道』は、「さりげない作りのわりには映像づくりと構成がキメ細かい上手で見事な作品。夫婦二人が紅白歌合戦をやるところでは涙と笑いが同時に溢れました。ここ数年で最高の作品と思う」（第31回）

『自己・内面表現の充実』 — 新しい自分を発見していく

勇気を持って自分を人前にさらす

映像を使って自分を描く手法には、直接自分にレンズを向けたもの、被写体に自分を語らせたもの、自分の心情を他のものに置き換えたもの、そして、捉えた被写体に対して自分の心情を述べることで内面を表現した作品がありました。有りのままの自分を表現しようとして、今まで気が付かなかった“自分”を発見することもあり、それを表現しようと、ドラマやドキュメンタリーという形で作品化された中は、作者の工夫とともに人前にはさらし難い内面の吐露とその勇気に、感動することが多々ありました。



第31回・ビデオ大賞
『Melanie-Ich gehe meinen Weg』
Klaus Fleischmannさん・ドイツ

盲目の少女・メラニーが、高校卒業を目前に自立して自分自身の道を歩む姿を描いたドキュメンタリー。目が見えなくても小さな頃から何にでも活発に挑戦、ミュージカルもピアノも。周囲の人たちに支えられ将来は社会福祉の道に進もうと希望に燃えている。



第27回・ビデオ大賞
『つぶつぶのひび』
大木千恵子さん（茨城県）

時給850円、1日60万個作られる納豆工場でのバイト生活の私。何のために生活しているのか、退屈な日々は過ぎていく。そんな日常から少し脱出しようと思った。風俗で働いている友達との再会、パイロットとの出会いをきっかけに、私は自分の足元を再確認する。



第28回・ビデオ大賞
『羽包む』
中井佐和子さん（奈良県）

高校生でシングルマザーになった“なべっち”とその息子“たいちゃん”の日常を描く。なべっちは妊娠から出産への不安や彼との別れなど当時を振り返り、今に至る心の変化を語りながら今後は母として女性として力強く生きて行こうという決意をこめる。



第29回・ビデオ大賞
『Plays the air.』
内田セイコさん（大阪府）

メイクアップアーティストを目指す主人公・美沙子が平凡な日常生活から脱し、目標に向かって生きることを両親に誓うというドキュメンタリータッチのドラマ。夢を抱く喜びと不安の中で、そんな自分と別れを告げ、地に足をつけて生きることを決心した。



第31回・優秀作品賞
『自毛デビュー』
加藤秀樹さん（埼玉県）

乳がん切除した女性に失った髪が生えはじめ、初めて自毛をカットする迄を追ったドキュメント。「がんばるね」が口ぐせの彼女は、会社に内緒で治療を続ける。抗がん剤投与や手術など病に立ち向かう彼女の勇気ある生き方を克明に記録。

<審査委員の評価>

佐藤博昭審査委員

『つぶつぶの日々』は、「自分の現在を塗り替えていくような、乱暴に前進する突発的なアクションが愉快な作品」(第27回)

高畑 勲 審査委員

『羽包む』は、「暖かくとりまく味方の存在が感じられて、全体が“はぐくむ”という言葉にびったり。彼女の友人である作者もまた味方の一人で、身近に二人をずっと見守ってきたからこそ、このすばらしい安定感が生まれたのだろう」(第28回)

小林はくどう審査委員

『Plays the air.』は、「映画やテレビとは違った普段着の映像を基本として計算しつつデリケートなカメラワークと演出のドラマである」(第29回)

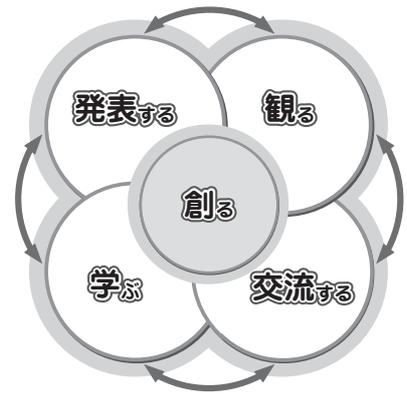
羽仁 進 審査委員

『Melanie-Ich gehe meinen Weg』は、「まわりの社会が、盲目の人間をいかに処遇するか。ゆったりと、しかし、心配りを持って。その関係がごく自然に感じられるところに心から感動」(第31回)

そして、いま、市民ビデオはどんな可能性を持っているのか

「発表する」「観る」「学ぶ」「創る」「交流する」。

TVFは、作品を「発表する」場としてはもちろんのこと、作品について学ぼうとする人たちが、他者の作品を「観る」「学ぶ」、そして「交流する」という場を得て、新たに作品を「創る」ことに繋がっていくことすべてがTVFでなのです。



入賞作品のWebによる映像配信 上映会、発表・表彰式

発表する
& 観る

入賞作品は、1月下旬よりインターネットでWeb配信を行うことで、全世界の人が視聴を可能にしました。また、テーマ別に作品を分けて大スクリーンでご覧いただく「入賞100作品上映会」。そして、表彰する会場でのセクション上映会、発表会、優秀作品を収録したDVDの貸出しで、多くの方にさまざまな形式で観る機会を提供しました。



入賞作品の解説から作品づくりを学ぶ 「市民ビデオセミナー」

観る & 学ぶ

TVF30年にわたる入賞作品の中から、作品を選んでじっくり分析・解説する「市民ビデオセミナー」。TVFの審査委員を講師に、身の回りの現象に眼を向ける視点を養い、作品化までの考え方を学ぶ場です。TVFに寄せられた作品を参考にしながら、題材の見つけ方や構成などについて解説すると共に、毎回、TVF入賞者の方をゲストにお招きして、ノウハウを披露していただきました。

【主なテーマ】

- ・『自己』を描く
- ・『社会』を描く
- ・『人』を描く
- ・『アート、アニメーション』の表現



映像づくりを授業に活かすための 「映像教育実践ワークショップ」

創る & 学ぶ

教育現場の先生方や教育関係者のみなさんを対象に行った、映像教育の実践ワークショップ。映像づくりを1から学び、機材を使った撮影・編集の実習、そして上映会まで、中身の濃いプログラムで映像づくりに取り組んでいただきました。映像づくりを教育現場で行うことの狙いや効果について理解した上で、絵コンテの作成からスタート。グループ分けされたメンバーを紹介しあうための撮影、編集を行い、最後に各人の作品の鑑賞を行いました。

【ワークショップの内容】

<1日目>

- レクチャー 1 映像教育の目的と実践例
(TVFの作品から学ぶ)
- レクチャー 2 映像制作の基本
- レクチャー 3 教育現場の映像制作について
- グループワーク ビデオカメラの使い方説明
課題内容の説明
絵コンテ作成

<2日目>

- グループワーク 撮影
編集
- 作品完成、作品を鑑賞、講評



それらが、ひとつの総体として動き出す

テーマを掘り下げて探究する
「市民ビデオフォーラム」

観る&
学ぶ



ゲスト：津野敬子氏

「市民ジャーナリズム」フォーラム

個人の視点、市民の目によるささやかな疑問や社会への提案が描かれた暮らしの中にあるジャーナリズムについて、ゲストを招いて開催しました。

◆特別講演ゲスト 津野敬子氏（ビデオジャーナリスト、DCTVの創設者）
「ビデオジャーナリズムとわが人生」

◆TVF作品上映&トークフォーラム

「TVF30年の市民ジャーナリズムの変遷」

TVF審査委員の羽仁 進氏、小林はくどう氏、佐藤博昭氏の3名と津野敬子氏が、活発化している市民ジャーナリズムについて意見を交わし、現状と未来、そして問題点について検証しました。



●「映像教育」フォーラム



ゲスト：寺脇 研氏

小・中・高の教育現場における映像づくりは、“グループ”で取り組み、自分の役割をきちんと果たしながら数々の問題に対して、乗り越えるための努力が求められます。フォーラムでは、制作の過程で様々な学習効果を内包している映像づくりの魅力について、ゲストを招いて開催しました。

◆特別講演ゲスト 寺脇 研氏

（京都造形芸術大学教授、
元文部科学省大臣官房審議官/文化庁文化部長）

「総合学習と映像づくりのすすめ方」

「つくり方を教えるだけでなく、チームで何かをつくる経験だったり、お互いの作品を見て批評し合うなかでのリテラシー能力やコミュニケーション能力などを養うこと」。文部科学省大臣官房審議官を務められた寺脇氏に、将来を担う子どもたちに対する健全な育成と、映像づくりを通じた学び方・学習のあり方についてお話をいただきました。

●「市民ビデオ」の今後について●

日本ビクターが主催してきたTVFは、31回をもって終了となりました。3月1日の発表・表彰式では、多くの方から惜しむ声を数多くいただくとともに、報道や個人のホームページ・ブログにおいても、TVFの功績や「市民ビデオ」活動の継承についてとり上げていただいています。TVFが灯した「市民ビデオ」は、市民一人ひとりの手に――。新しいコンセプトによって、動き出そうとしています。まるで新聞の投書欄のように、身近に起こっているできごとに対して自らの考えや意見を述べ、それに共感する人、異なる意見を持つ人が、自由に意見を述べ合うという、そんな動きが始まっています。

◆事例紹介 進行・コーディネーター /下村健一氏

（市民メディアアドバイザー、
キャスター）

「学校現場における映像づくりの実例紹介」

- ▼映像を使った総合学習とまちづくりとの融合
〈神奈川県横浜市立滝頭小学校/まちの元気づくり支援拠点「夢たま」〉
- ▼総合学習をきっかけとした映像制作と部活動の展開
〈東京都杉並区立東原中学校〉
- ▼地域環境問題に取り組む子どもたちの映像制作活動
〈福岡県北九州市立曾根中学校〉
- ▼地域の問題を映像を通して探求する市民ジャーナリズム
〈長野県大町北高等学校〉
- ▼美術コースの必須科目となった映像メディア表現の新たな展開
〈神奈川県立弥栄高等学校〉
- ▼公共広告の手法を使った映像表現と産官学協働活動
〈滋賀県成安造形大学〉



TVF終了を
報じるメディア

審査委員からのメッセージ



TVFの30年、その終了に当たって、市民ビデオ精神が未だきちんとこの社会に伝わっていないという苛立ちもあるので、それは勿体無いから語り置きます。

大林宣彦 映画作家（第1回～第31回審査委員）

終了、——終わった、という感覚が僕にはありません。表現に終りは無く、僕には映画を作る、とは生きる事と同義語で、生きてる限り映画で表現し続ける。更には死後も映画は存在し続け、やがては人類の叡智の歴史の一部となることを願う。TVFもね、今やビデオ作品の集りを越えて“市民ジャーナリズム”となった。ジャーナリズムは過去と未来を結ぶ“温故知新”のコミュニケーション。むしろ、これから始まるTVFを、僕は一所懸命見詰めたい。その未来に願いを託したい、——と思うですね。

ビデオ、というけれども、そこにはかつては8ミリフィルムも忍び込み、今やデジタル機器の導入は当たり前。携帯電話での映像表現も可能となった現在、“ビデオ”フェスティバルという制度的括りは不自由になった。それが2009年の映像的現在ならば、30年のTVFの一つの節目ではあるだろう。しかし海外の映像作家の誰もが、今でもそのビデオ作品を“フィルム”と呼ぶ。それは伝統への敬意であり、精神に機器的制度は無い事を伝えている。

コンテストという制度に拘わらず、フェスティバルとして出発したTVFは、戦後、独裁や権力から自由民主主義として出発したこの国が、多数決もまた悪しき一つの権力となることを体験、今や制度犯罪による破壊の危機に瀕している社会の中で、少数者の考えや意見を尊ぶ事を推して来た。制度の中のナンバー1より、人として己と同様に他者を認め、互いにオンリー1であろうとする思想こそが、諍いではなく、平和を導くフェスティバルには現出し得るであろうと。

映画やテレビは選良を求めるが故にプロとアマを生む。しかしビデオは等しく市民としての表現であり、マスコミによるジャーナリズムが客観性を求めるあまり最大公約数的多数に陥り、一つの情報に偏り過ぎて客観性を失い権力化していく中、市民ジャーナリズムは個と個の対話が普遍に育つ。正義の偏重は戦争に至るが、正気は平和に迎り着く。TVFの30年はこの社会が真の民主主義を学ぶ場であつたのだ。

かつてのアマチュアがそのまゝの姿で今や世界有数の個人ジャーナリストと成るなど、社会は明るい未来に向かいつつある。主催者の日本ビクターが制度を超え、市民ビデオの様々なあり様を多様に迎えた事の、それは貴重な成果である。販促用イベントとしての形は、TVFの精神が疾うに捨てている。TVFの現在の形が失われても、その精神は未来を目指す。お目度う！ と述べるのみであります。09.3.7



市民の手で地球を融合したTVF

小林はくどう ビデオ作家、成安造形大学教授（第1回～第31回審査委員）

31年も続けられたのは不思議で、関係者の皆様に感謝です。

テレビの生みの親、高柳健次郎や、VHSを開発した高野鎮雄らを擁して高い技術力を誇っていた日本ビクターの見識だから、ビデオコミュニケーションのコンセプトを実行できたといえます。ビデオは当初アーティストの表現メディアにしか過ぎませんでした。映画やTVとは違った、撮るビデオの文化、コミュニケーションの道具としてのビデオを地球規模で使いたいとの願いから誕生しました。1977年に企画したとき、既に私の中では現在のネット市民社会の予感があり、年齢、国別、ジャンル別、プロ・アマなどの区別をなしました。TVFの開催は国境を越え、プロ・アマを含んだ市民作家たちが受賞作に刺激を受けて広がりました。特に、国を超えた学校のビデオレター活動を始め、地域のメディアにはビデオは重要なものとなりました。初期、故荻昌弘審査委員は「ビデオとは「作者が同時に創られる者になる」文化だとし、映画史で見れば80年代に市民がビデオで映像を持てた方が映画のカラー化やトーキーになった以上の激変だと注目されるでしょう」と語っておられます。『ブラウン管民主主義』、『市民ビデオ』、『ビデオケーション』という言葉も生まれました。アマゾンや北極からも作品が届いたときは、やり続けることで、地球をビデオテープで包んだなあ実感しました。企業メセナ大賞を頂いたときがひとつのピークかなと思っています。初期、故手塚治虫審査委員が審査委員を辞退されたことがありました。ところが翌年、授賞式会場の聴衆の中にお姿を発見して、また戻っていただいたことがあります。大変忙しい身でしたが、TVFに魅力があって、見のがしたくないお気持ちが強かったようです。他の審査委員も同様だったのではないのでしょうか。毎回時代の状況の変化《今》と作者の《私》を見つめることが出来、作品に立ち会っている審査委員の《私》も幸せだったと思います。地球を市民の手で融合させたこのプロジェクトを国連が主催すべきだし、TVFのビデオ社会学を今後も続けて行きたいなあ願っています。



30年の蓄積を次のステップへ

佐藤博昭 ビデオ作家、日本工学院専門学校講師（第23回～第31回審査委員）

第23回（2001年2月3日表彰式）にゲスト審査委員として参加してから、9年にわたって作品を見てきました。著名な審査委員の先生の中で、きちんと主張が出来るのかと怯えていたのを思い出します。初めての最終審査委員会では、昼食後に椎名誠さんが「ここから本当のバトルですよ！」とわざわざ脅かしていただきました。そして本当に、しかも真剣勝負が展開されました。中谷芙二子先生の教え子だった私は、当初、ビデオアート作品を積極的に擁護しようとしていました。しかし集まった多くの作品を前にし、また、各先生の卓見に触れ、作品世界の広さと深さを痛感しました。

市民ビデオは年々、確実にその裾野を拡大し、作品の質を上げています。審査委員のひとりとして、この静かながら大きくなると併走できたことを誇りに思います。それにしても、いったいどれだけの数の市民ビデオ作家と出会ったのだろうか、と思ひ返しています。表彰式だけでなく、毎年各地で行われた作品上映会やセミナーでは、参加者の熱心な質問攻めにあいました。02年の熊本会場では、その前年の大賞作品『ダムの水は、いらん！』の作者・佐藤亮一さんと酒を飲み交わし、その弟さんのお宅にお世話になってしまいました。出会ったみなさんはそれぞれの地域で活動をする、立派な市民映像作家たちでした。TVFのこうした市民ビデオ普及活動はもっと知られてもよかったです。

TVFが映像文化の蓄積と展開に貢献してきたことは、誰もが認める偉大な功績です。しかし、その終了を残念がっている時間はありません。世界の市民ビデオ作家たちが、この瞬間にも新しいメッセージを発信しようとしているからです。私も微力ながら、次のステップへと併走していくつもりです。



映像で伝えてきた偽らざる三十一年間の世界規模の「私たちの生活と意見」

椎名 誠 作家 (第14回～第31回審査委員)

とても素晴らしい歴史のなかに加わらせていただいた、という感謝と歓喜と、いささかの哀惜のなかにいます。

いま、ぼくたちの生活のなかには否応なしに映像が介入してきます。それらの多くは商業主義の、おしつけの映像で、わたしたちが感覚的に本当に求めているかどうか、そういう意識とはまったく関係ない、暴力的ともいえる襲いかかる映像が殆どです。つまりヒトの心の本当のところの迫ってくる、本当の映像とその「ちから」とは無関係の、ろくでもないなにかしらの策略にみちた映像ばかりです。

私が関与させていただいた十数年間の、このすぐれて能動的かつ真剣で「フェア」な映像のフェスティバルにかかわる映像作品は、その対極にあったのだなあ、と、今になってしみじみ実感しています。

「市民ビデオ」と言われていましたが、まさしく本当に、市井の生活者が、映像で伝えてきた偽らざる三十一年間の世界規模の「私たちの生活と意見」が、この壮大な事業で生み出されたのだな、という感慨を実感しています。

この「思想」と「蓄積」はかならず市井の映像文化の今後の成長と発展の巨大ないしすえになっていくものと思います。

多くのビデオフェスティバルが終焉していくなかで、ある意味では「愚直」といっていいくらいに、しっかりこの事業を続けてきたビクターという、ある意味「おひとよし」で辛抱強い会社の仕事に頭の下がる思いです。素晴らしいプロモーションに参加させていただいて、心より感謝します。



新参者の敬意と感謝

高畑 勲 アニメーション映画監督 (第27回～第31回審査委員)

審査用に大量の映像が自宅に送られてくる。一旦はその重みに押しつぶされる気がする。ところが、見進むうちに引き込まれる。すごい、面白い、あったかい。毎回、驚きと感動を新たに。新鮮な発見がある。制作の楽しさ、伝えたいことを伝えようとする真剣さ、観察の粘り強さ、込められた思いの濃さ、質の高さ。見せてもらったことが嬉しく、撮った人にありがとうと言いたくなる。そしてフェスティバルが終わるたびに、TVFの大いなる意義深さを実感し、次回への期待が直ちにふくらむ。

新参者の私は、たった五回しか審査やフェスティバルに参加していない。それでさえこうなのだから、三十一年という、驚くべきTVFの歴史を共に築いてこられた審査委員と日本ビクターの方々の思いの深さは想像にあまりある。応募総数も、海外からの参加も増加の一途をたどり、映像としての質も、ジャンルや素材の多様な広がりも、上向く一方だった。社会的に果たしてきたその役割の大きさを思うとき、この栄えある東京ビデオフェスティバルの終了はいかにも残念である。これを励みにして制作を続けてこられた方々の無念も思いやられる。

しかし、いまはまず、社会的な価値のとびきり高いTVFを維持してこられた関係者に、出費を厭わなかった日本ビクター社に、そしてもちろん応募者の皆さんに、心からの敬意と感謝の念を表したい。ご苦労をねぎらいたい。ほんとうに立派で高級なフェスティバルだった。また個人的には、審査委員や関係者の方々の魅力に親しく接し、啓発されるという、素晴らしい機会を与えて頂いたことにも深く感謝したい。

そして次に去来するのは、ここに蓄積された貴重な財産、莫大な作品群を「宝のもちぐされ」にしてはならないのではないかと、それをどう社会的に活用できるか、すべきなのか、それを考えるときが来ているという強い思いである。



新しい文化がついに生まれた！

羽仁 進 映画監督 (第4回～第31回審査委員)

たしか、二回目のTVFを見に行った。立派な大ホールで行なわれたのだが、突然停電した。直したら、又停電した。直したら、又停電した。

有名な司会者の男女だった。女性は一回目からかなり興奮された。男性は、二回目まで何とか頑張れたが、三回目には、ついに言葉を失ってしまった。思わず、僕は客席から声をかけた。

「これこそ、ビデオ文化の夜明けの祝砲じゃありませんか！」

とっさの言葉だったが、ふりかえてみると、案外、これはまともな表現だったかもしれないと、思うようになった。

三十一回を迎えた今年、全世界から寄せられたビデオ作品は、まさにいままでにない「文化のスタイル」を見せてくれたのである。昨年までは「もう一歩！」と、というるさい注文をつけていた僕も、すっかりおとなしくなってしまった。

そこで、長いあいだTVFを支えてこられた日本ビクターの力が、ついにつきたのは、不思議な奇蹟のような気がしてたまらない。もし昨年、中止が決まっていたら、「残念だ」という想いが先立ったかもしれない。しかし、今年はまだ「ありがとう」という叫びが最初に飛び出してきた。

多分、これからのいろんな事があるだろう。その中には、生まれたばかりの新しい文化の芽にはきびしい寒風もあるかもしれない。しかし、もう大丈夫だ！と僕は信ずる。「公」とか「私」とか二つだけに分けられるものではない。その間に、ついに新しいコミュニケーションの言葉が生まれたのだ。それは何より確かなことだと思う。

審査委員や関係者からのメッセージ



市民が創るTVF

北見雅則 日本ビクター株式会社 (第26回～第31回審査委員)

VHSを発売した翌年に、第1回東京ビデオフェスティバルの公募は始まった。

ビデオ作品を作ろうと思えば、業務用のカメラと分離型レコーダーしかなかった時代。総重量は13キロを超えていた頃。

ビデオの先達は、やがて「ビデオは市民のもの」になり「市民によるビデオ文化が生まれる」と信じていた。

ハードとメディア、圧縮技術の進化は、ビデオ機器の軽量化と画質や性能の向上に大きく貢献した。コンピューターの普及、編集ソフト環境の進歩は、ビデオ制作に劇的な変化をもたらした。こうした技術進化、「誰もが簡単にビデオ撮りでき作品制作ができる環境を作る」為の努力を惜しまなかったエンジニア達に大きなエールを贈りたい。本当にありがとう。

しかし本当に「市民ビデオ」を創ってきたのは多くの市民の情熱だった。そうした人々に勇気と意欲を与えた審査委員のアドバイスだった。心から感謝の気持ちを表したい。マージャーナリズムには絶対に表現できない「52,517の個性」が31年間に集まった。

毎年の審査がとても楽しかった。審査委員となって6回目の審査となるが、作品を一人で見たことは一作品もない。仲間と一緒に視聴し、語り合うことで、尚一層の理解と多面的な作品評価を分かち合う事の大切さを学んだ。「創る喜び、観る喜び、語る喜び」がTVFの本質である。

今回で日本ビクターが主催するTVFは終了する。しかし、TVFが生み育てた「市民ビデオ」「市民ジャーナリズム」の芽は枯れることなく、「市民が創る」ビデオフェスティバルとして、市民の間に生き続けていくと信じている。

第31回「東京ビデオフェスティバル」発表会に寄せて

山口勝弘 (メディア・アーティスト、筑波大名誉教授、元TVF審査委員)

1970年、日本は大阪万博の大成功により沸き上がっていました。そのさなかに、1人のカナダ人マイケル・ゴールドバーグさんがソニーのポーターバックを担いで東京に現れました。彼のミッションは、日本の情報メディアがテレビによる独占的体制に占められている状態に対する新しい黒船となることでした。

彼の持ってきたアーサー・キングバーク著『ゲリラテレビジョン』は中谷英二子さんにより翻訳されました。

1972年、日本で初めてグループ「ビデオひろば」が結成され、その第1回デモンストレーションが銀座ソニービルで行われました。まさにビデオ元年でした。

この時代的変革の中から東京ビデオフェスティバル (TVF) が発足したのです。TVFの根幹にはアメリカ流草の根民主主義があったと思います。

いま地球は大きく揺れています。これは歴史の必然の揺れです。そういう時代だからこそ市民コミュニケーションが必要なのです。TVFが市民の対話を促した功績はとて大きく深いものがあります。だからこそ、市民コミュニケーションの火としてのTVFの聖火を消してはならないのです。あのギリシャの民主主義発祥の地アゴラを忘れてはならないように。

TVFが、市民ビデオという草の根の民主主義を31年間継続してきたことを讃えます。私からの提案があります。

TVFのすべての作品をDVD化して国立国会図書館に収めることです。

それらの作品を、発展途上国の人たちに見てもらおう。彼らに大いに利用してもらえばいいのです。日本大使館のある国なら、ぜひTVF作品の利用方法を考えてください。

インターネットやケイタイが普及した今こそ、TVFの果たしてきた対話と交流には民主革命の歴史的価値があります。それを大切にしましょう。

TVF31年間の作品は、人間のこころの動きの偉大なオベリスクです。2009年3月1日

下村健一さん (市民メディアアドバイザー・キャスター、東京都)

TVFは映像文化におけるひとつの遺産。みんなで映像を撮って見せ合って、ワイワイやることで、また新しい何かが生まれる。映像の保存を含め、31年も続いた、この歴史を終わらせてはいけない。

可越さん (入賞者、「東京視点」代表、東京都)

私自身、「映像はマスメディアの占有物ではなく、市民の手で発信されるものだ」というTVFの精神にとっても共感します。

河田茂さん (第23回ゲスト審査委員、広島県)

審査員の先生方が侃々諤々議論しあう情熱には、TVFの魂を見る思いでした。TVFは終了しても、その魂は、そのDNAは、世界のおちこちで芽を出し葉を茂らせています。それらを、私たちみんなで育てていきましょう。

守田一博さん (入賞者、京都府)

TVFを作品づくりの目標にしてきました。いろいろ実験的な手法を試みられたのは、TVFあってのものと思っています。

西山洋一さん (入賞者、東京都)

最初は、作品づくりの技術的なことに喜びを感じていたのですが、回を重ねるうちに、作品の本質やビデオを介したコミュニケーションの可能性などを大いに学ばせてもらいました。

津野敬子さん、J・アルパートさん (入賞者、アメリカ)

TVFは、フィルムではなくビデオに脚光を当てた初めての祭典であり、私たちのようなビデオ制作者にとって大変意義のあるもので、今回で最後となるのは、とても残念なことです。

高橋美由紀さん (入賞者、東京都)

生徒の努力の結果を地域の人にも知ってもらおう、こうした機会がなくなってしまうのは残念です。

藤井喜郎さん (入賞者、神奈川県)

私の入賞作品が、長期入院を余儀なくされた子供達への映像提供に役立つというお話には、涙が出る思いでした。どこかで自分のつくった作品が人の心を慰めることができるとしたら、うれしい限りです。TVFの存在の大きさが認識されます。

池田稔さん (入賞者、栃木県)

表彰式で、審査員の方から「撮影対象に愛を注がないといい作品は生まれにくい」と学び、「よし、わかった。次こそ！」と思ったのですが、TVF自体が無くなってしまおうとは、とても残念です。

梅田正孝さん

(星の降る里芦別、ふるさとビデオ大賞実行委員長、北海道)

市民ビデオの火を消すことなく、TVFに作品を応募してきた一人ひとりが、何らかの形で日本各地で花を咲かせるのが、意思を受け継いだ私たちの役割と考えています。

佐藤均さん (入賞者、東京都)

大袈裟に言えば人生の半分をTVFとともに過ごしてきたと感じています。TVFに参加することで、国内のみならず海外の友人もたくさんでき、人間的なつながりを広げることができた。

●その他、たくさんの方々からメッセージをいただきました。

●TVF年表

開催と応募作品数 (参加国と地域)	審査委員	大賞作品名	発表 年	TVFの動き	上映の動き	業界の動き
	●印：審査委員長 太字：新委員	太字：ビデオ大賞 細字：日本ビクター大賞	1976 (S.51)			・家庭用VHS規格ビデオの発表・発売
第1回TVF 257作品 (4)	●南 博/大林宣彦/荻 昌 弘/小林はくどう/手塚治虫 /山口勝弘/坂井敬一	「走れ！江ノ電」(日本)	1979 (S.54)	・作品募集開始 (1978) ・ビデオ大賞1 ・ビデオインフォメーション センター (VIC東京) ・ビデオリポータークラブ、 ・ビデオケーションクラブ		・VHSポータブルビデオシステム 発売 (日本ビクター)
第2回TVF 328作品 (4)		「BUBBLING」(アメリカ)	1979 (S.54)	・VIC大阪		
第3回TVF 669作品 (10)	●南 博/大林宣彦/荻 昌 弘/小林はくどう/手塚治虫 /中谷美二子/羽仁 進/山 口勝弘/菊池敏博	「THIRD AVENUE : ONLY THE STRONG SURVIVE」(アメリカ)	1980 (S.55)	・ビデオ大賞1 ・VIC全国で展開		
第4回TVF 741作品 (20)		「LIFE WITH RAY」(アメリカ)	1981 (S.56)			
第5回TVF 1,003作品 (22)		「わかれ」(日本)	1982 (S.57)	・ビデオ大賞1 ・日本ビクター社長賞設置 ・ビデオレーター部門設置 ・スカラシップ制度 (ビデオ制作奨励制度)		・VHS-C規格決定、 C I T Y - J A C K 発売 (日本ビクター) ・8ミリビデオ懇談会発足
第6回TVF 1,176作品 (18)	●南 博/大林宣彦/荻 昌 弘/小林はくどう/手塚治虫 /中谷美二子/羽仁 進/山 口勝弘/菊池敏博	「LOVE OF LINE, OF LIGHT AND SHADOW : THE BROOKLYN BRIDGE」(アメリカ)	1983 (S.58)	・「ビデオ仲間集い」開催		
第7回TVF 1,330作品 (27)		「道産馬の詩・道産馬と生きる馬道」(日本)	1984 (S.59)			・VHS-Cムービー発売 (日本ビクター)
第8回TVF 1,413作品 (22)		「VIETNAM-TALKING TO THE PEOPLE」 (アメリカ)	1985 (S.60)	・特別部門 「テーマ青春」設置		・8ミリビデオ発売 (ソニー)
第9回TVF 1,425作品 (24)		「VIDEO LETTER EXCHANGE Longfellow-Furzedown」(アメリカ)	1986 (S.61)			・超小型ビデオムービー発売 (日本ビクター)
第10回TVF 1,661作品 (30)		「A Bridge Over the Ocean」(日本)	1987 (S.62)	・ビデオケーション賞設置 ・第10回TVF記念 シンポジウム開催		・S-VHS規格ビデオ発表・発売 (日本ビクター)
第11回TVF 1,380作品 (21)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/中谷美二子/羽仁 進/山口勝弘	「ビデオ家庭訪問」(日本)	1988 (S.63)			
第12回TVF 1,340作品 (23)		「クールに包まれたあたたかさ」(日本)	1989 (H.1)			
第13回TVF 1,441作品 (24)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/中谷美二子/羽仁 進/山口勝弘/五味英毅	「スケッチブック三十路囀」(日本)	1990 (H.2)			
第14回TVF 1,352作品 (18)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/椎名 誠/中谷美二 子/羽仁 進/山口勝弘/五 味英毅	「破れ表紙の人生アルバム」(日本)	1991 (H.3)			
第15回TVF 1,364作品 (26)		「韓国へ行った」(日本)	1992 (H.4)			
第16回TVF 1,615作品 (33)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/椎名 誠/中谷美二 子/羽仁 進/五味英毅	「生き生きてポッポポ」(日本)	1993 (H.5)			
第17回TVF 1,673作品 (34)		「DOBRE NAJEDENI RIDICI BULDOZERU」 (チェコ)	1995 (H.7)			・デジタル方式ビデオカメラ発売 ・インターネット登場
第18回TVF 1,767作品 (32)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/椎名 誠/中谷美二 子/羽仁 進/坊上卓郎	「東京ハ、カコヒンダー」(日本)	1996 (H.8)		・インターネット ライブ中継実験	・ポケットデジタルムービー発売 (日本ビクター) ・インターネット本格普及
第19回TVF 1,947作品 (36)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/椎名 誠/竹中直人 /中谷美二子/羽仁 進/坊 上卓郎	「カラさなせなく」(日本) 「高校生のみた沖縄」(日本)	1997 (H.9)	・日本ビクター大賞設置		・インターネット放送局登場
第20回TVF 2,096作品 (41)		「LIFE OF CRIME : DELERIS'S SAD STORY」 (アメリカ) 「テレビは何を伝えたか」(日本)	1998 (H.10)		・インターネット ライブ中継実施	・YouTube 投稿動画サイト登場
第21回TVF 2,154作品 (40)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/椎名 誠/竹中直人 /マリ・クリスティーン/中 谷美二子/羽仁 進/中村 勝	「ビデオに挑戦」(日本) 「冷暖人間～女子大一家」(中国)	1999 (H.11)		・地域上映会展開	
第22回TVF 2,018作品 (32)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/椎名 誠/竹中直人 /マリ・クリスティーン/中 谷美二子/羽仁 進/河田晋 吾	「残された4000枚の絵」(日本) 「Ruído」(スペイン)	2000 (H.12)			
第23回TVF 2,202作品 (39)	●南 博/大林宣彦/小林は くどう/椎名 誠/佐藤博昭 /竹中直人/マリ・クリステ ィーン/羽仁 進/河田晋 吾	「天野川」(日本) 「21世紀をどう生きる・・・わが家の野生動物」 (日本)	2001 (H.13)			
第24回TVF2002 2,270作品 (43)	大林宣彦/小林はくどう/佐 藤博昭/椎名 誠/羽仁 進 /清水宏紀	「タムの水は、いらん！」(日本) 「子供達と共に」(日本)	2002 (H.14)	・ビーブル賞設置 ・入賞100作品認定 (優秀賞30、佳作70)	・Web配信実施	
第25回TVF2003 2,386作品 (38)		「ROGO」(日本) 「TICK TACK BLUES」(韓国) *	2003 (H.15)	・TVFアーカイブ作品デジタル化 ・DVD入賞作品集作成 ・TVFプログラム上映会展開		
第26回TVF2004 2,881作品 (36)	大林宣彦/小林はくどう/佐 藤博昭/椎名 誠/羽仁 進 /北見雅則	「逆上がりができないの何でだろう？」(日本) 「BOMI DIA MARIA DE NAZARE」(ブラジル)	2004 (H.16)	・ハイビジョンムービー賞設置 ・インターネット放送局と提携 (OurPlanetTV、東京視点)	・TVFアーカイブ Web配信	・ハイビジョンムービー登場 (日本ビクター)
第27回TVF2005 2,605作品 (39)	大林宣彦/小林はくどう/佐 藤博昭/椎名 誠/高畑 勲 /羽仁 進/北見雅則	「つぶつぶのひび」(日本) 「Off to War : chapter TWO」(アメリカ)	2005 (H.17)	・日本語字幕入れ ・市民ビデオシンポジウム実施	・定期上映会実施 (新橋ビル)	・ハードディスクムービー発売 (日本ビクター)
第28回TVF2006 2,291作品 (35)		「羽包む」(日本) 「Family」(韓国)	2006 (H.18)	・映像教育実践セミナー実施	・定期上映会展開 (新橋ビル)	
第29回TVF2007 3,491作品 (55)		「Plays the air」(日本) 「Fear no Evil」(アルゼンチン) 「漢字テストのふしぎ」(日本)	2007 (H.19)	・市民ビデオフォーラム実施 (市民ジャーナリズム)	・セレクション 上映会展開	・ハードディスクハイビジョンムービー 発売 (日本ビクター)
第30回TVF2008 2,010作品 (53)		「いまどきの21歳の主張」(日本) 「The Last Chapter (最終章)」(カナダ) 「学びの場が消えていく」(日本)	2008 (H.20)	・市民ビデオフォーラム実施 (6月：市民ジャーナリズム) (8月：映像教育) ・映像教育ワークショップ実施 (アップルジャパンと連携)		
第31回TVF2009 2,231作品 (54)		「メラニー - 自分の道をゆく-」(ドイツ) 「共に行く道」(日本)	2009 (H.21)			

※TVF開幕 (2009.3.1)

みんな 育ててくれて ありがとう

入賞した人も、惜しくも選外となった人も、作品を送ってくれてありがとう。

みんなの思いは、しっかり伝わっています。

審査をしてくれた先生方、いっぱい作品を見て、アドバイスしてくれてありがとう。

みんなの思いを、きちんと受け止めてくれました。

発表会に来てくれた人も、フォーラムやセミナー、

ワークショップに参加してくれた人もありがとう。

すべての場面で、人と人とのふれあいが生まれた瞬間でした。

人の思いを共有できた空間が広がりました。

作品を通じて人と語り合いたくて、みんな幸せな社会をつくりたくて、

TVFの軌跡は、みんなで作ってきた市民ビデオ普及の歴史です。

心をこめて、みんな育ててくれて

——— ありがとう。